

# 文化庁長官就任にあたって

文化庁長官 河合 隼雄

このたび、はからずも文化庁長官に就任することになりました。「はからずも」というのは、常套句としてではなく、まったく文字どおりのことで、最初に打診されたときにはすぐに返事できず、しばらく答えを保留させていただきました。「文化」と言えば、私などよりもはるかに造詣の深い方が数多く居られると思ったからです。しかし、いろいろ考えてお引受けすることにしました。そのときに考えたことは、次のようなことです。

現在の日本は不況の暗さの中に沈んでいます。不況を英語で言うとデプレッションですが、デプレッションは私の専門の心理療法の世界では「抑うつ症」のことです。言うなれば、日本人全体がうつ状態にあるようなものです。抑うつ症の心理療法においては、結局のところ、その人の創造性が発揮されて、何か新しい創造的な表現ができるようになって治癒に至ることが多くあります。

これと同様に、現在の日本において文化の活性化を試みることは、極めて必要なことであり、文化を動かしてゆく「心」というものが大切になってきます。したがって、私のような、心の専門家が文化庁の仕事を引受けすることは、あながち不適當と言えないので

はないか。何か日本中を元気にし、楽しくするようなことを考えるといいのではなからうか。日本人の持っている潜在的な可能性を引き出す方策を考えよう。このように思ったのであります。

まず思ったのは、「文化ボランティア」の促進です。これは以前から主張してきたことです。「福祉」という言葉は「幸福」を意味します。日本人は戦後の貧困体験もあって、「幸福」という場合、「もの」の豊かさを大切に思いすぎたのではないのでしょうか。「もの」が豊かになるだけでは幸福でないことを知り、日本人は今、「心の豊かさ」を大切にしようと考えはじめています。心を豊かにするものこそ、文化ではないでしょうか。そこで、「文化ボランティア」の重要性が浮かびあがってきます。

美術館、博物館などの面白い企画や、そのための宣伝、労力の提供など、ボランティアのすることはいっぱいあります。「うちの町に一度、ほんもののオーケストラを呼びたい」、「歌舞伎を見たい」、いろいろなことがあります。ボランティアの活動と行政との一致協力なしに、このような仕事はできません。上からではなく、下から盛りあがってくる「公共的」な仕事の展開です。



かつて、小渕元総理のもとで「21世紀日本の構想」懇談会の座長を務めたとき、「新しい公の創出」の重要性を報告書の中で強調しました。文化ボランティアはまさにそれに当たるのではなからうかと思えます。何とか日本中に波を起こしたいものです。

文化ボランティアにも関連しますが、地方の文化活動の促進も考えたい。日本という国の強さは、各地方それぞれに、文化的に高く、豊かな人材を多く持っているのです。このような人々と協力し、ボランティアの活動と相まって、地方の文化活動の促進を図りたい。日本の各地には、素晴らしい文化会館や、美術館、博物館などがあります。これらができる限り生かせる工夫をしたいと思っています。

次の課題は国際的な文化交流の発展です。グローバルゼーションの波の高さは防ぎようありませんが、これによる地球の平坦化を免れるには、文化の力に頼るしかありません。日本人は他文化の良さを知り、受け入れる力を持つとともに、有難いことに世界に誇れる文化を持つ

ています。国際的な文化交流は、もっと進めることは可能なはずです。

日本文化というとき、文学、芸術のみならず、日本人の考え方、感じ方ということも広く含むべきと考えます。これらのことを、他の国の人々が理解できるように努力することも必要です。日本にはこんな特異なものがあります、だけでは駄目で、それがどのようにして普遍的なものとなっていくのかを明らかにしなくてはなりません。それでこそ、日本文化や日本人の持っている良さが他の文化を持つ人たちにも伝わってゆくでしょう。

不況と言いつつ、日本の高齢者の中には相当にお金を持っている人も多くいます。その人たちが沈んでじつとしているのではなく、現在の日本にある豊かな文化を享受するために、もう少しお金を使うと、その人たちの生活も楽しくなるのみならず、日本全体の経済の活性化につながっていくのではないかと考えます。経済と文化は国が栄えるための車の車輪のようだと思います。いずれか一方が先だとか、上だと言うよりも、両者を共に動かしてゆくことを考えるのが得策です。わが国の文化の発展のために、できる限りの力を尽くしたいと思います。